和歌山大学教育学部附属小学校

らいぶ 創 つくりえいたー
LIVE CREATOR

NO.70
2014年5月
研究広報誌

学びをデザインする子どもたち

～課題意識の深化を通して～

CONTENTS

●発刊にあたって「学びをデザインする子どもたち」を育てるために・・・・1
●本校の研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2・3・4
●教科部紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5・6・7
●共同研究開発校・研究スタッフ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

「学びをデザインする子どもたち」を育てるために

―「応答関係」の質的発展をー

和歌山大学教育学部附属小学校長　船越　勝



新年度が始まり、早くも１ヶ月余りがたちました。新しく入学してきた１年生の子どもたちも、ようやく附属小学校での生活にも慣れ、教室からは、「先生、あのね～」、「え～、なんで？」、「私はね、～」等々、子どもたちの楽しそうな声が聞こえてきます。子どもたちは、仲間とともに、楽しく学び始めているようです。

私たち附属小学校では、「学びをデザインする子どもたち」を研究主題に掲げて、今年度で３年目を迎えます。このように仲間とともに、楽しく学び始めている子どもたちは、実は、既に学びとその物語（ストーリー）をデザインし始めているのではないかと思います。というのは、学びとは、「対象・他者・自己」と出会い、そのことに「応答」することであります。この「応答関係」の質的発展が、子どもたちの切実で、必然性のある「課題意識」とストーリーを生み出し、対話の過程としての学びをデザインしていくことになると考えるからです。今年度、副題に「課題意識の深化を通して」を付けさせていただいた所以です。

たとえば、教師が教室に学習材としてのモノを持ち込み、そのモノとの子どもたちの出合いを用意します。（対象との出合い）当然、子どもたちはそのモノとの出合いに触発されて、「それ何？」「見せて！」と「応答」し、「私は～と思います」と「自分の意見を言いたい」という願いを持ち、子どもたちの自主的な追究と学びが始まります。

しかし、同時に、子どもたちは、自分の意見を言いたいだけでなく、「自分の意見を○○君やみんなに聞いてほしい」（他者との出会い）、「自分の意見についての○○君やみんなの意見を聞きたい」（他者との出会いを通した自己との出会い）ということを求めます。さらには、そもそも○○君やみんなはどのように考えているのか、「○○君やみんなの意見を聞きたい」、「○○君やみんなの意見に対する自分の意見も言いたい」という願いも必然的に生まれてきます。

また、中学年から高学年になれば、子どもたちの「応答」は、「○○君は～と言っているけど、なぜそんなふうに言うのだろう？」とか、「○○君の意見に自分は～と思うんだけど、自分がそのように考えるのはなぜだろう？」とか、よりメタ・レベルの思考と「応答」も可能になってきます。つまり、「学びの３C」と言われますが、特定の学習内容の世界にこだわったり（「内容（content）」の C）、その子なりの認識や思考の仕方に着目したり（「認識（cognition）の C」）,その子の生活背景などの文脈に基づいたり（「文脈（context）」の C）しながら考えて、そうした根拠ある意見に「応答」し、自分たちなりの「課題意識」と学びを深めていきます。言い換えれば、子どもたちの「課題意識」の深化は、子どもたち相互の「応答」による意見の練り上げによってこそ生まれてくるのです。

このように、子どもたちの「応答関係」が紡ぎ出されていくなかで、切実で、かつ必然性のある「課題意識」が生成され、自分たちの力で学びがデザインされていくことがわかります。もちろん、こうした子どもたちの「対象・他者・自己」との出会いを通した「応答関係」の質的発展を豊かに育んでいくためには、教師の確かなみとりと支援が何よりも求められます。

私たちは、今年度、このような学びを子どもたちとともに、総力を挙げて創り出していきたいと考えています。本紙３・４ページに掲載しています様々な研究会を予定しています。どうか多くの皆様方の積極的な参加をお願い申し上げます。

本校の研究について

★本年度の研究テーマ

学びをデザインする子どもたち
～課題意識の深化を通して～



研究主任
梶本 久子

研究主題である「学びをデザインする子どもたち」は，子どもたちが主体となって課題解決を行う姿をめざし，今年度で最終年度となります。



研究に携わっていただいた秋田喜代美先生（東京大学大学院）からは，その成果として，①聴き合い学び合う関係として，教師の適切なかかわりから子どもの思考の流れを焦点化していく授業が観られたこと②環境作りや場の工夫が子どもたちの学び合う姿につながっていることの２点を挙げていただきました。また，校内研究授業などを参観し，指導していただいた二宮衆一先生（和歌山大学）には「学級風土の具体的な姿を示すことが必要である」「授業を観る視点を共有し，協議会のもち方を変えることで，研究が深まり積み上がっていくのではないか」というご指摘もいただきました。上述の先生方からのご意見をもとに，私たち教師は，子どもたちを学び手として育てるために，聴き合い学び合える学級風土についてめざす子どもの姿を掲げ，研究協議のもち方についても工夫することで，学びをデザインする子どもたちを育てることができると考えました。

そして，今年度は「課題意識の深化を通して」をサブテーマに研究主題に迫っていきます。課題意識の深化とは，子どもたちの興味関心から生まれる「学びたい」という欲求が授業の学習課題に向かっていったり新たな疑問を生み出していったりする過程ととらえています。その課題意識を深化させるためには，他者の意見を受け止め，共に考えていこうとする受容的な姿勢が何よりも大切になってきます。

それが自分の課題意識を変容（転換・確信）させていくことになるのです。この受容と変容の繰り返しにより課題意識が醸成されていき，深化へとつながっていきます。

実際に研究を進めるにあたり，

① 居場所ある学級風土づくり
② 子どものみとりと支援
③ 授業を観る「視点」の共有

の３つをポイントとして取り組んでいきます。

① 「居場所」とは，全ての子どもが受容的な風土の中で「課題を解決したい」という強い思いのもと仲間と問い続け，学び続けられる場所をさします。具体的には，誰もが学びに参加できる教室・子どもの中に問いが生まれる教室・子ども自らの課題意識を深めて学びをつくる教室・他者とつながることの喜びを分かち合う教室・誰もがより高い学びに挑戦できる教室，以上のような「学級風土」が課題意識の深化の土台となりえると考え，学級独自に行われていた「学級風土づくり」を今一度見直し，それをどのようにつくりあげていくか，有効な手立てを学校全体で共有するようにしていきます。

② 子どものみとりと支援では，学びをデザインする子どもたちを実現するために「課題意識をどう深化させるか」という視点でのみとりと支援を重要視します。みとりと支援を行うことで学びをデザインする子どもたちを育てていくのですが，具体的な手立てとしてどのようなみとりと支援が有効であるのか研究を進めていきます。

③ 授業を観る「視点」を共有し，子どもの学びを探るために，校内研究授業のもち方の工夫や授業記録の活用を大切にし，協議会では授業記録をもとに分析を行います。その時には，着目児やその他の子どもの発言，教師の発問を追うことによって「学びをデザインできた」場面を探り，どのようにして「学びをデザインしたのか」，その前後の学級全体の様相を分析していきます。

これら３つのポイントについては，さらなる提案をしていきたいと考えています。

今年度予定している研修会・研究会の案内を次頁に掲載させていただきます。

ぜひ和歌山大学教育学部附属小学校へ足をお運びください。

研修会ならびに研究会のご案内

夏季教科・領域別研修会

7月24日(木)	
午前の部(9:30～12:00)	午後の部(13:30～16:00)
社会　生活　複式	社会　理科　体育
7月25日(金)	
国語 算数 音楽 図工	国語　食育

※夏季研修会での研修内容，お申し込みは，次号にて詳細お伝えします。
また，本校ホームページでも随時情報を提供していきます。





平成26年度教育研究発表会

◆2014年11月2日(日)

○単式学級・複式学級あわせて全21授業を公開致します。

○講演・対談(予定)　秋田喜代美先生（東京大学大学院教授）

佐藤　学先生（学習院大学教授）





みなさんのご参会お待ちしています！

両研究会とも，詳細は，後日，本校ホームページにてご案内いたします。

第8回　ICT活用授業研究会

昨年も，web 申し込みにて先着１００名限定という形で行いました。多くの皆様にご参会いただきました。「ＩＣＴ活用授業研究会」として，**２０１５年1月３１日(金)**本年度も開催させていただきます。





第13回複式授業研究会



3時間目（10：30～11：25）**1･2F（算数）**

4時間目（11：40～12：25）**3･4F（国語）5･6F（理科）**

＊午後から，全体会･各教科協議会･講演会

◆2014年 6 月 14（土）10 時 30 分～17 時 00 分

お申し込みは、web（http://www.aes.wakayama-u.ac.jp）または、FAX（073-436-6470 まで）

STAFF

校　長	船越　　勝	副校長	池田　彦男	校内教頭	辻　　伸幸		
1　A	湯浅　明菜	1　B	中西　正子	1　C	吉久　寛郎		
2　A	市川　哲哉	2　B	田中　千映	2　C	渡辺　　圭		
3　A	矢出　大介	3　B	馬場　敦義	3　C	北川　勝則		
4　A	小杉　栄樹	4　B	久保　文人	4　C	居澤　結美		
5　A	西村　文成	5　B	川村　繁博	5　C	梶本　久子		
6　A	小谷祐二郎	6　B	則藤　一起	6　C	上田　　恵		
1・2F	土岐　哲也	3・4F	宮脇　　隼	5・6F	中西　　大		
音　楽	内垣　美佳	音　楽	江田　　司	家　庭	静川　郁子（産休）		
栄　養	神山　求実	養　護	森本　孝子		武友多佳子（家庭）		
	浅野万里菜（図工・体育）		髙原　優樹（体育・国語）				
	角村　会美（養護）		糸川　良夫（理科）		山本　眞喜（理科）		
	大平　陽子（児童支援）		佐原ちづよ（書写）		髙瀬　優佳（音楽）		
	Ｊoan　Ｏnizuka（外国語活動）		Launa　Karasuno（外国語活動）				

どうぞ　よろしく　おねがい　いたします。

教科部★紹介

国語科部　学び合いを支える言語活動の充実

言語活動の充実が実践課題となっています。国語科部では，「学び合いを支える言語活動」とは，その場その場で教師によって与えられた指示に従って学習を進めるのではなく，子どもたち自身が明確な意図をもって学習を進めていくことができる言語活動と考えています。クラスみんなが安心して学べる学級風土の中で，子どもたち一人一人の課題意識を深化させながら夢中になって学べる授業をめざし，充実した言語活動を取り入れた授業づくりを研究していきます。



湯浅明菜　　小杉栄樹
北川勝則　　宮脇　隼

社会科部　一人一人の学びの充実をめざして
～ ひとり学習を全体学習の場面へ ～

社会科では，全体学習の中で友だちの考えを聞き，自分の考えや思いを出し合う中で，子どもたちが学びをデザインし，焦点化していく授業をめざしています。より深まる学びにつなげるためには，ひとり学習の充実を大切にしたいと考えています。昨今，社会的事象は複雑化し，「ひと・もの・こと」に関する価値観も大きく変化しています。社会の問題を自分にかかわりのあるものとして受け止め，一人一人がこだわりをもって追究していく学習をすすめていくことが大切です。



矢出大介　梶本久子

今年度も，子どもたちをしっかりみとり，対話によって個の「問い」「こだわり」を追求し深めていくことを大切にしていきたいと思います。よろしくお願いします。

算数科部　子どもの思考が創る算数科学習
～互いの考えを豊かに表現し合いながら～



市川哲哉　小谷祐二郎　土岐哲也
川村繁博　　吉久寛郎

算数科では，算数的活動を取り入れた学習を通して，「子どもたちの思考が創る算数科学習をめざして取り組みます。自分の考えの根拠を明らかにしながら，子どもたちは互いの考えを表現し合い，課題解決に向かいます。その道筋を「子どもたちによる学びのデザイン」と捉え，具体物の操作・言葉・数・式・図などを用いて表現できる子どもを育んでいきます。

また，子ども一人一人が自分なりの思考をもてるように，算数的活動を重視した教材の工夫，課題提示の工夫，互いのコミュニケーション力を高める工夫の「３つの工夫」に重点を置きながら研究を進めていきます。

夏季教科領域別研修会・教育研究発表会などで，授業公開を予定しています。よろしくお願いします。

教科部★紹介

理科　　科学的な見方・考え方を育て，自然事象の本質をさぐる理科の学び



中西大　西村文成　馬場敦義　久保文人

子どもたちは，これまでに知っていたことでうまく説明できない事象に出合ったとき，疑問や問題をもつことになります。その「ふしぎだなあ」とか「どうして？」と思うことは「わかりたい」「わかった」「なるほど」につながる大切な気持ちです。

今年度も理科部では，理科の原点である「楽しさ」や「感動」を大切にした実践をしていきたいと考えています。ものとのふれあい，つまり対象との出合いで興味関心を高め自ら探求することが楽しくなるような理科をめざします。その中で，理由や根拠を他者と共有することで学びを深め対象に対する自分の見方・考え方をより科学的な見方・考え方へと変容させていこうと考えています。

７月の夏季教科等別研修会や１１月の教育研究発表会に，ぜひご参会ください。

生活科　　自立をめざして

～主体的に活動・体験し，自分自身への気付きをはぐくむ～



中西正子　田中千映　神山求実

生活科の目標は「具体的な活動や体験を通して～自立への基礎を養う」ことです。この活動や体験で出会うすべての“ひと・もの・こと” に，子どもたちが主体的にかかわってほしいと考えています。

そのために，子どもたち一人一人の「思い・願い」を大切にし，“つぶやき・気付き”をいかした授業づくりをめざします。

子どもたちのわくわく感が持続する単元計画，気付きの質を高める指導・支援の在り方を探っていきたいと考えています。

音楽科　　「比べる」でせまる音楽の魅力

～思いや意図をもって表現できる子どもに～



内垣美香　　江田 司　　居澤結美

音楽科では，子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けていくために「比べる」を大切にし，子どもたちがいきいきする表現及び鑑賞活動を通して，音楽の魅力にせまっていきたいと考えています。

思いや意図をもって表現できる子どもに育てるために，

①表現と鑑賞の活動において「比べる」学習の筋道を明らかにします。

②聴き取ったことや感じ取ったことなどを，学年の発達の段階に応じて表現し，伝え合っていきます。

③「比べる」活動を「対話」とリンクさせることによって，楽しみながら学びをデザインすることをめざします。

教科部★紹介

体育科（学校保健）部



体育科　「体育大好きふぞくっ子」が育つ授業の工夫
～一人一人の学びを導くみとりと支援～

「体育大好き！」そう言えるふぞくっ子が育つように，運動に対する一人一人の思いを丁寧にみとり，学びを支援していきます。

子どもたちは授業の中で「もっと運動を楽しむためには？」と問い続けその解決に向けて 楽しみが積み重なる学びを進めていきます。

則藤一起　　渡辺　圭　　森本孝子

学校保健

小学校生活 6 年間で，生涯にわたって健康な生活を送るための素地づくりをすることが必要です。その中で，子ども一人一人がたくましく生き抜くために，自分のからだや健康を意識して生活を見直し，自らすすんで健康づくりに取り組む意欲と実践力を身につけて、生涯にわたる健康へとつなげられるようにしていきたいと考えています。

図画工作部
感じよう　伝えよう　楽しい　図画工作



多様な素材、題材を体験したり、1 つの素材にこだわって、時間をかけてかかわったり、多様なはたらきかけを試したりします。思いや経験を「伝える」ために「見え方」「伝え方」を工夫した作品作りにも挑戦したいと考えます。

自分の「感じ方」を大切にしつつ、友だちの「感じ方」に共感したり、刺激し合ったりたりする鑑賞にも取り組みます。

浅野万理菜　　上田恵

複式教育部　主体的に学び合う複式教育
～学び合いの場を生み出すみとりと支援～



学びをデザインする子を実現するために，「学び合いの場」を生み出すためのみとりと支援の在り方について，今年度も研究を進めていきます。

子どもたちは，対象に出合ったとき，経験や既習事項を通して理解したり認識したりしようとします。視点を変えて対象を見つめ直すと新たな疑問がわいてくる，そんな学び合いの場が生まれるみとりと支援の在り方，教師の出番について考えていきます。

さらに，司会・記録係の技能向上を目指すことで，「学び方を学ばせる」ことにも取り組んでいきたいと考えています。

中西　大　　宮脇　隼
土岐　哲也

共同研究開発校・スタッフ

共同研究開発校

教科等	学　校　名	校　長	学　校　名	校　長
国 語	和歌山市立　浜宮小学校	沖　香寿美　校長	海 南 市 立　大野小学校	東條　容子　校長
社 会	和歌山市立　雄湊小学校	川本　美紀　校長	和歌山市立　雑賀小学校	森田　啓子　校長
	和歌山市立　藤戸台小学校	横町　真紀　校長		
算 数	和歌山市立　砂山小学校	市川　貞蔵　校長	和歌山市立　吹上小学校	高橋　量也　校長
理 科	和歌山市立　宮北小学校	鎌田　淳一　校長	和歌山市立四箇郷北小学校	貴志　年秀　校長
生 活	和歌山市立　雄湊小学校	川本　美紀　校長	和歌山市立　宮北小学校	鎌田　淳一　校長
	和歌山市立　芦原小学校	亀位　直規　校長		
音 楽	和歌山市立　貴志小学校	北山　圭子　校長	和歌山市立　広瀬小学校	酒井　千佳　校長
体 育	和歌山市立　中之島小学校	硲間　正子　校長	和歌山市立　今福小学校	宮本　博信　校長
	和歌山市立　宮前小学校	内田　敏夫　校長		
図 工	和歌山市立　雄湊小学校	川本　美紀　校長	和歌山市立　西和佐小学校	栗本　昌彦　校長
複 式	有田川町立　城山西小学校	堀内　千佐子校長	海南市立　南野上小学校	山中　幸也　校長

From Editors

『らいぶ・創りえいたー』も 14 年目を迎えました。「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を込めています。

本校ホームページにはカラー版を掲載しています。ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

編集委員：矢出，中西，川村，居澤，宮脇，田中





和歌山大学教育学部附属小学校
〒640-8137　和歌山市吹上１丁目４番１号
TEL　（０７３）４２２－６１０５
FAX　（０７３）４３６－６４７０
URL　http://www.aes.wakayama-u.ac.jp